Precious Melody（番外編）

七海くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｒｅｃｉｏｕｓ　Ｍｅｌｏｄｙ（番外編）

【Ｎコード】
Ｎ４２００Ｏ

【作者名】
七海くれは

【あらすじ】
『Ｐｒｅｃｉｏｕｓ　Ｍｅｌｏｄｙ』の登場人物がそれぞれ語る短編集。
７つの音色を、一つの曲に。

Chapter1：助けた理由

え？　何だよいきなり？
番外編だから何か語れって？　ったくかったりぃなぁ……。番外編なんてどうでもいいのに。
まぁいいや。めんどくせーけど。で？　何について語ればいいんだ？
あぁ、あの時の事ね……はいはい。

あれは……センター試験の終わりの日だ。俺と和也、圭輔とみさきの４人でいつものように行って帰ってきたっけ。
「はぁ……。もう嫌だ。アレじゃどの学校も怪しいな……」
「そうか？　オレは前日の一夜漬けが効いたみたいだから結構自信あるぜ」
「一夜漬けは……あまり好ましくないと思う。やっぱり日ごろの勉強が……」
「まっ、オレはもう学校決まってるから結果なんか気にしてないけど」
「はーいはい、過ぎた事をいつまでも言わないの！　せっかく開放感に包まれてたってのに、台無しじゃなーい！」
「そうだよなー。もう今日はパーッと遊ぶか！」
「賛成。おれも久々に羽を伸ばしたいし」
そうそう、こんな感じで遊ぶ事になったんだっけ。
この後……みさきだか圭輔だかが『制服姿じゃ動きにくいからイヤだ』とか言ったからいったん地元に戻ったんだな。
センターの会場は行ったこともない場所だったし、制服姿で行く事になってたからってのが理由。
改めて集合した俺らは、とりあえずゲーセンだかビリヤードだか

に時間を使った。
俺は見てる事のほうが多かったっけか。金使いたくなかったし、何より出来るものが少なかったってのが最大の理由だけど。
そこで適当に遊んだ後は街に繰り出す。いよいよ冬も本格的になってきたから、道行く人々も何だか慌しかったな。
そのうちに……何だかよさげなブティックを見つけたんだ。
そこのショーウィンドウに展示してあったどっかのブランドの冬用コート、これがみさきの目を引いたらしくて、そこから動かなくなってやんの。
はっ、わっかんねぇなぁそういう考え。暖かければどんなブランドのコートでもいいじゃねぇか。
何でまたそんな、そりゃもう目ん玉飛び出そうになるくらいバカ高いものに惹かれるかね。

そんなみさきを一人ほっといて男ども3人でつるんで適当に散策する。
まぁ、ほっとけって言われたからこっちはそうするしかなかったんだけど。
そうしたら……もと来た道から何やら口論らしき声が聞こえてきた。
「な、なぁ二人とも？　なんか聞こえなかったか？」
「あぁ。何だかシャレになってない雰囲気のような気がする」
「行ってみるか？」
「そうだな」
この時ばかりは俺も黙ってられなかったので、その声のする方へと引き返した。
「げ……路地裏からかよ。ここって危険じゃねぇのか？」
「そうそう。ここ使えば駅にすぐ出られるんだけど、悪そうな奴らが集まってるらしいぜ」

「便利だけど、誰も使わない……ってか。おれだってこんな所通るのなんて嫌だ」
俺ら3人、揃いも揃ってやや逃げ腰だった。そりゃそうだ。高校でもここは通るなって言い聞かされるくらいだ。
だが、さっきから聞こえてくる声はだんだんとはっきりとしたものになってゆく。どうやら男女の口論のようだ。
俺らは前後左右、果ては頭上や足元にも気を配りつつ、その声のする方へと足を運んだ。なにしろどこから襲われるか分かったもんじゃないからな。

そしてようやく声の主を発見した。状況は……女の子がいかにも不良っぽい二人組の男にからまれてる。
女の子のほうは、不良の一人に手首をつかまれていて逃げようにも逃げられないらしい。
その場所からは駅が見えていた。言ってみればここは、数ある路地裏の入り口のうちの一つ。よって、道行く人は多いはず。実際人通りはかなり多かった。
にもかかわらず、俺らが行くまで誰も助けに入ってないのはどうにも解せなかった。誰も助けねぇなら、俺らがやるしかねぇじゃねぇか。あーめんどくせー。
……でもここで見捨ててはいさようならじゃ、俺もそんな奴らと同類だ。それに、そんな奴らから変な目で見られたくなかったしな。
人間なんてそんなものだ。誰でもいいから下に置いて優越感に浸りたいんだ。
俺は、下に置かれるような奴にはなりたくない。
こうして生を受けているからには、その命に真っ直ぐ向き合う。その、俺なりの答えが……下に見られないことだ。
気が付いたら俺はこんな事を口走っていた。
「おいお前ら。女の子1人に野郎2人が相手してんのかよ」

言いながら一歩前に出ると、和也に圭輔もそれに続いてくれた。
すると、不良がすぐにこう返してきた。
「何だいアンタら？　オレらはこの娘に用があるんよ。あっち行って」
……その娘はお前らに用がある風には見えないけどな。
「ちょっとねぇ……見苦しいかなキミ達。女の子ってのはもっと丁重におもてなしするものだよ？」
「いや、それは今使っていい言葉じゃないと思う」
「ぬぅ。空気読めてないのはオレだけってか。で、どうすんだよ？」
「そうだな……この中で一番足が速いのはシュウだから、おれと圭輔であいつらの相手をしよう。その間にお前はあの娘を安全なところへ連れてくってのはどうだ？」
「オッケー。いいじゃんいいじゃんその作戦」
「任せときな。現役を退いたとはいえ、俺に追いつける奴なんかいるわけないんだからな」
この辺のやりとりは小声でする。奴らに聞かれたら意味がない。
そして、自慢ではないが俺は自分の足の速さには少しは自信があった。
こう見えても陸上部で短距離ランナーとして、それなりに頑張ってきたんだ。
見るからに学の備わっていない、すなわち高校の部活を味わった事のないようなチーマー程度には、例え女の子を引っ張りながらでも負ける気がしなかった。
「どうしたぁ？　逃げないのかぁ？　逃げないならちょーっとヒドイ目に遭ってもらっちゃおうかなぁ？」
よし、聞こえてないようだ。
「誰が逃げるか！　お前らと遊んでやるよ。かかってきな！」
「ひゅーっ、シュウくんかーっこいい！」
「実際相手するのはおれ達なんだけどな。ははは」
「ちぇーっ、オレらも随分ナメられちまったもんだぜ。よっしゃ行

くぜぇ！」
そう言うなり、不良たちは女の子から手を離す。……ここだ！
「お前の相手はおれだ！」
「シュウ、今だ！　早くその娘を安全なところへ！」
「分かってるよ！　ほら、こっちだ！」
無我夢中だった。和也と圭輔が不良たちを相手にしているさなか、俺はその娘の腕を引っつかんだ。
路地裏から脱出し、そこからさらに走り出す。……とりあえずみさきがいたブティックまで戻ろう。

「はぁ……はぁ……」
ようやくさっきのブティックまで戻ってきたが、みさきの奴はまだそのコートを見てやがった。ったく、俺らの苦労も知らないで……。
「あ、あの……」
申し訳なさそうに女の子が声をかけてくる。
「悪い、ちょっと待っててくれ」
まずは圭輔たちをここまで戻さないと。俺は圭輔の携帯にワン切りを仕掛ける。
すると……すぐに圭輔からの着信があった。
「どうやらうまくやったみたいだな。お疲れさん」
「あぁ、まぁな」
「で、今お前らどこにいるんだ？」
「例のブティック。みさきの奴はまだアレ眺めてるよ」
「そっか……。しょーがねぇなアイツも。んじゃーこっちもうまくまいてきたから、そっちに行くよ」
「なるべく早くな。説明とかすんのかったるくてしょうがねぇ」
「わかったわかった。あと5分くらいで合流できると思うよ。んじゃなー！」
向こうの方から通話を切ったので、俺もそれに合わせて切る。

「あ。あの……助けてくれてありがとうございます……」
またも芽衣が声をかけてくる。今度はお礼つきで。
「別に……礼を言われるような事はした覚えはない」
そのやりとりにようやく気付いたらしく、みさきは俺らの元へと近づいてくる。
「ねぇねぇシュウ？　その娘だーれ？」
やっぱり聞いてきたか。めんどくせぇ。
「話せば長くなるが……」
と言った途端、圭輔達が小走りで駆け寄ってくる。
「ふぅ～……疲れた。全力疾走は久々だったからなぁ」
「まぁ、ここまで来れば大丈夫だろう。それより……よくやったなシュウ」
「あぁ、まぁな……。お前らのおかげだよ」
「げっ、シュウが人褒めるなんてめっずらしい。こりゃ明日は真夏日だな」
「おい、そりゃどう言う意味だ？」
「言葉通りだ」
「あっそ……」
「ねーちょっと！　アタシらを無視しないでよー！」
みさきが声を張り上げる。あー相変わらずうっせぇなぁコイツは……。
「なぁシュウ。お前あの娘にちゃんと説明した……わけないよな。まだ放心状態だもんな」
「まぁ、もとからコイツには期待してないから。じゃーいいや。オレが代わりに説明するよ」
そこから圭輔の、長くてやや誇張された説明が始まった。何だよ『そこに現れた3人のヒーロー』って。一人ってしないだけまだマシなんだろうけど、聞いてるこっちが恥ずくなるぜ。
ほら、あっけにとられた顔してるし……。だけど圭輔の奴は、これがまた生き生きとした顔で語ってるんだよ。きっと、本当に楽し

いと思ってるんだろうな……。
ようやくその娘も状況を飲み込んだらしく、自己紹介をしてくれた。
……そう、この時助けた女の子が、今俺の彼女として存在している……芽衣というわけだ。
聞けば、わざわざこっちの大学に通うために一人暮らしを始めたから、この辺りの事をよく知るために散策していたらしい。
あれ、センター試験は受けなかったのかな？　まぁいいや。しっかしその頃からすげぇ奴だったよな。
そんな奴と付き合ってる俺って……合ってねぇよなぶっちゃけ。俺だけ浮いてるみたいな。

……あー、こんなこと考えるのもめんどくせーや。やめだやめ。

Chapter2：焔ーほむらー

何にしようかな、話題。あれ、いってみるかな？
よっし、せっかくの機会だからこの話題でいいか。

他のみんなと違って、オレは専門学校に進学したからわりと早めに進路が決まっちゃったわけ（でもセンターは付き添いで受けてみたけど）。
よっしゃ～これで遊びまくりだ～……と思ったけど、何をするにも金が要るんだよな……。
遠くでやるイベントに行くなり何か買うなりでそろそろ持ち金が冗談じゃなくなってきたからバイト探し始めたんだ。そこであのヘタレに会ったんだっけ。
面接の時も言葉巧みにこなした結果、オレはめでたくバイトを手にした。誰にも言う事なくバイトに精を出した。
それから一ヶ月が過ぎたあたり、新入りが来たとの連絡があった。何でも、オレとタメ年らしい。誰だろうか？
男だったら普通に仲良くなればいいし、女の子だったらお近づきになるチャーンス！
……まぁ、結局男だったんだけど。しかしそいつがまたオレと趣味が合うんだ。
ま、こんな所にバイトしに来るんだから趣味合うのは当たり前なんだけどな。ちなみにバイト先ってのはゲームショップね。
そいつの名前は森野翔司。オレみたくわりと早くに進路決まったからバイトすることにしたんだと。卒業危なかったとも聞いたけど……。
新人同士ってことで同じ時間に入る事が多く、帰りも一緒だった。それで話してるうちに意気投合したってわけだ。

あの日の帰りも一緒になってすれ違う女の子について話してたっけ……。
「うお、あの娘かっわいぃ～！　翔司、お前どう思う？」
「えぇ～そうかぁ？　確かにかわいいけどさぁ、あの娘に比べたらな……」
「お、お、お？　気になるなーその言葉。な、あの娘って誰だ？
「……オレが気になってる娘の事だよ。完全な片想いだけどさぁ」
「大事だ。よく言ってくれたな。……で、その娘どんな娘なんだよ？」
「えー？　言うの？　そうだなぁ……。行動が面白くて、すっげぇ子供っぽくて、ツインテールがマジでかわいくて、背の小さな娘だよ。……お前とは頭２つは違いそうだな」
「え、そんなちっちゃいのか？　オレのダチのカノジョもありえないくらい背ぇ低いけど、そんくらいかね？」
「だろうな。１５０ないって聞いたし。オレも１７０ないけどそれでもかなりの身長差だよなぁ」
「だな。で？　その娘にお前の気持ち言ったのか？」
「い……言えるか！　オレの性格わかってんだろ！？　今じゃあの娘が視界に入るだけで胸がこう、苦しくなって、言おう言おうとしてた事が全部ぶっ飛んじまって……」
そう言ったところで翔司は足を止める。だが、まだ話は終わっていなかった。
「それにさ、その娘には好きな奴がいるんだ。しかも、もはやそいつしか見えてないみたいで……」
自分が傷つかぬようになのか知らないが、その時の翔司は慎重に言葉を選んでいるように思えた。
「彼女がそれを一番だと思っている以上、オレが介入する余地ってか、資格なんかないような気がして……」
同じ調子で、言葉を紡ぎ続ける翔司。
だが、口ではそう言っていても、内心はそんな事を思ってるわけ

がない。でなければ言葉にする事はないからな。
　翔司はその娘に告白したいが、勇気が持てないんだ。それを悟られたくないからそう言っているだけだ。
「……なぁ、お前本当はそう思ってなんかないだろ」
「えっ……？」
「とぼけても無駄だ。オレには分かる、お前が強がってるのがな……」
「……」
「わざわざそんな話を自分からしたってことは、誰かしらに相談したかったんだろ？　言葉はそうでなかったとしてもだ、本心はそのはずだ」
「そうかも……知れない」
「ある程度自分の中でもどうすべきか決めてるんだけど、それでいいのかどうか答えが出せないんだろ。……ま、あえて聞かないけどね。聞かなくても分かるし」
「ははは、やっぱお前には隠し事できねーな。……告白したいよ、そりゃ」
「やっぱりな。じゃあ告っちゃえよ。いつまでも悩んでたって向こうからしてくるわけでもないんだし」
「わかってるよ。でもな……せめてその娘が受験終わるまで待ってやりたいんだ。今オレが告ったとしてもそれどころじゃなさそうだからな」
「そっか。受験控えてるんじゃ仕方ねーよな。なら受かるように応援してやれや。それくらいなら出来るだろう？」
「そうだな。そうしておけば終わった後の告白もうまくいくかも……」
「……そうだ翔司よ、何かアドバイスしてやろっか？」
「アドバイス？　……いいや、いらね。こういうのは自分の力だけで何とかしたいわけ」
「ほぉ」

「それに、お前のアドバイスなんて全然参考にならなそーだし。なんならギャルゲーでもやった方がまだマシそうだ」
「て、てめぇ！　よくそんな言葉が吐けたもんだな……！」
「あれあれ？　その反応なにかなー？　モテねー男の負け惜しみにしか聞こえねーぞぉ？」
「ぐっ……。そうだよちくしょー、オレは彼女イナイ歴１８年目突入だよ！　そんなオレのアドバイスなんざ参考になりませんよねー！？」
確かにオレには未だかつて彼女と呼べる存在ができた事はない。だが！　同じ境遇の奴にだけは言われたくなかった！
「ってかお前だってそうじゃねーか！　今のその片想いだけじゃ、イナイ歴はリセットされねーんだぞ！　わかってんのかこのヘタレ！！」
……そう、いつもこんな感じだったんだこいつとは。
何だかんだ言って、オレと趣味を同じくする奴と話すってのは、シュウや和也、ミネタクとだべるのとはまた違った面白さがある。

後でわかった事だが、翔司の好きな娘ってのはなんと音遠ちゃんだったんだ。
翔司、諦めた方がいいな。音遠ちゃんは兄貴の灯夜しか見えてねーし。
「いや、早く言えってそーゆー事は」
「だってさー、まさかお前があの兄妹とも知り合いだったなんて知らなかったわけだし。……ってかさ、ダメなのか？　オレは」
「現状では厳しい。ひっじょーに厳しい！　高校の卒業式でお前が何て言ったか知らないけど、灯夜以外の男に振り向かせるのは難しいな……」
「そう、それなんだよ！　式が終わった後すっげー泣いてたからさ、オレが『泣くならボクの胸の中で泣いていいよ。さぁ、こっちにおいで……』みたいに言ったんだよ」

なんだこいつ、きめぇ。
「したら『お兄ちゃんじゃなきゃイヤだよぅ……』って言われたから……。へコむへコむ」
「たりめーだろアホ。いや、お前は正真正銘のドアホだ。ゲームと現実をごっちゃにしてんじゃねーや」
「む……」
「確かにあの娘みたいな素直な娘には最適な言葉かも知れない。でもな、そういう場でそんな事ほざけるお前はバカを通り越してアホも通り越してまたバカに戻るくらいのバカだ」
「いや、バカとかアホとか言いすぎだろいくらなんでも……」
「うるせーバカ。でもな、諦めるのはまだ早い。あいつらは結局は本当の兄妹。2人ともそれはわかってるから、キスこそすれどもそれ以上はしないって灯夜から聞いた」
「な、なんだって！？　キ、キス……！？　あんにゃろ、今度会ったら脳を漂白してやる！」
「落ち着けって。とにかくだ、いつかはあの関係も、普通の仲のいい双子になるんだろうから、狙い目はそこだ。お前が音遠ちゃんの事を本当に好きならそれまで待てるだろ？」
「あぁ待つよ。待ってやるよ。初めて真剣に好きになった娘だからな……」
「よく言った。お前はやっぱりバカだ。でも、いい意味でのバカだ。お前のそれを、何て言うか分かるか？……一途。そう、お前は一途な男なんだ」
翔司って奴は、いまどき珍しいくらいに単純一途な男だ。オレも見習うべきところがたくさんある。
「好きになった相手にはとことんまで好きになれるし、悲しませたりする事もないだろう。お前には、そういう才能があるんだ」
「そうか……。オレみたいな奴の事を一途っていうのか……」
「それだけ純粋なんだよ。わかるだろ？」
「ああ……。でもなんかそれ、自画自賛っぽいな」

「まぁアレだ、お前には灯夜には無い良さがある。お前しか持ってない良さがな。それこそ純粋なとことか、音遠ちゃんにピッタリだと思うぜ。それを彼女に見せてやれよ！」
「オレの良さを……彼女に……。ありがとう。おかげで自信が持てたよ。……オレ、灯夜には負けない。絶対にいつか、音遠ちゃんをオレに振り向かせてやる！」
「ああ……。オレはその日が来るのを、いつまでも待っててやるぜ」
オレたちは堅く手を握り合った。翔司、頑張ってくれ。

いい気分になったオレは、まだ時間もあったので久々にミネタクに連絡を取ってみた。
いつ以来になるんだ？　高校入ってからはあまりしてなかったからな……。
「あ、圭輔くん？　久しぶりだね！　どうしたの？」
「いやな、ちょっと久々に話したくなってな。今ヒマか？」
「うん。でも懐かしいな～」
ん？しばらく話さないうちにミネタクのヤツ、随分と明るく話すようになったみたいだな。

……その謎は、再会したそいつの隣に居た人物によって解明されたのだった。
「な、ななななななな……何だとーーーーーーーーーーーーーー！？」
「うん。うちら付き合うてるのよ」
「あはは……そういうこと」
「てめぇミネタク！　このオレを差し置いて！」
「わーわー、ギブギブ！」
なんと！　ミネタクのヤツはいつの間にか凛子ちゃんと付き合ってやがってんの！　ミネタク、お前もかっ！　はぁ、何でまたオレの周りの奴ってのは……。

「まぁいいや。なぁ2人とも、オレらが今よく行ってる喫茶店行かねぇか？」
「うん！　久しぶりに会うたんやし、いっぱいお話したかったんよ」
「あ、ノロケ話されるとオレがもれなく泣くからそのつもりで」

オレらはＨｅｘａｇｒａｍにやってきた。多分この2人は行った事が無いだろう。
「ちゃーっすマスター！」
「いらっしゃい。お、圭輔くんか。今日は……見たことない子がいるね。友達？」
「そそ。中坊の時のね」
「ま、ゆっくりしてってよ。席はどうする？　カウンター空いてるけど？」
「あー、んじゃカウンターで」
「はいよ。何を差し上げましょか？」
「オレはトリュフパフェで」
「え……何それ？」
「あ、ここの名物ってトリュフパフェなんだよ。な、マスター？」
「なにそれ、初耳だよ」
「はぁ！？　あんたなに寝ぼけたこと言ってんの！？」
「ウソウソ。本場から毎日空輸して取り寄せてる極上のトリュフを使ってます。この店オリジナルの一品です」
「おもろいなー。ほな、うちもそれで！　タッくんもそれでええか？」
は……？　凛子ちゃん、今なんとおっしゃいました？
「うん。リンリンがそう言うなら」
ぐぐ……貴様！　なんだそれは！
オレは、こいつらがニックネームで呼び合う光景を目の当たりにして、顔で笑っていても心の中で怒り狂い、咽び苦しんだ。
それにしてもミネタクの奴め、いつの間にこんなキャラに……？

中学時代とは１８０度変わってねぇか？
オレがそんな風に考えていると、マスターが小声で囁きかけてきた。
（なぁ圭輔くん？　キミ、凹みに来たのかい？　わざわざラブラブなカップル連れてきたりして……）
（いや、そーゆーわけじゃなくて……。オレだってこいつらがまさかここまでとは……）
（とにかくだ、キミはここでくすぶってるのは似合わない。他人のアドバイザーになるのもいいけど、そろそろ自分も動いてみたらどうかな？）
（マスター……）
（その時は僕がアドバイザーになってあげるよ。んじゃ今からトリュフパフェ作るから）
（……）
「はーい、トリュフスリーで！」
「あれ……？　あの、ちょっと聞いてもいいですか？」
「ん、何かな？」
「この店って……従業員はお一人ですよね？」
「うむ。僕だけだ」
「だったら今、誰を呼んだのかな……って思って」
「あー、強いて言うなら……心の中にいる……もう一人の……素直な自分に……かな」
「……」
マスターの独特な世界に、ミネタクと凛子ちゃんは半ば放心しながらも、次第に打ち解けていった。今度みんなにもこいつらを紹介してみるかな？
２人と別れたオレは、夜道を一人で歩きつつさっきのマスターの言葉を思い出していた。
「ここでくすぶってるのは似合わない……か」

確かにそうだ。オレは今日だけで翔司の奴を励まし、ラブラブカップルの生態も垣間見た。
だがオレ自身はなんだ。そういうのを見るだけで満足しているだけではないのか？
だからマスターもあんなこと言ったんだ。
ならば……オレは今にも消えそうな焚き火から、天をも焦がさん勢いで燃え上がる炎、いや、焔になる！
素直じゃない奴にも、鈍すぎる奴にも、相手と血が繋がってる奴にも、気弱な奴にも、空回りばかりしてる奴にも……心の中に『火』を持ってる。
二つの火が結びついて『炎』。言い換えると、男の持つそれと女の持つそれが結びついて一つの『炎』となる。
オレのはまだ……小さな火種でしかない。まだその気になっていないので、燃え上がることもない。
和也はともちゃんと、不器用ながらも一つの炎を形成しているし、シュウと芽衣ちゃんも……大雨にも負けない大きな炎を燃やし始めたではないか。
灯夜に音遠ちゃんもいつかは独立した火になるが、今は何よりも強く燃えている。翔司も今はただの火だが、いつかは大きな炎となるだろう。
そして……ミネタクも過去を乗り越え、大きな炎を生み出した。
オレもそろそろ動くべきだな。誰にも負けない大きな炎を燃やすために。
いつまでも消えない、何よりも強い、オレだけの炎を。
燃え上がれ、秋野圭輔よ。何物をも飲み込む、焔となれ。

ふぅ、疲れた。オレはこれで終わり。

Ｃｈａｐｔｅｒ３：栄光と挫折

おれの番か。そこまで盛り上がるような話題はないが……あれでいいか。過去の話で。

今思えば中学時代、テニスに打ち込んでた頃は、今とはまた違う楽しみがあった。

部活の仲間とお互いに刺激しあいながら成長していくという過程は、本当に楽しかった。

聞けば、おれが１年の２学期まで通ってた中学は、おれらのひとつ前の学年までは地区予選大会の１回戦で勝てれば御の字くらいの実力だったらしい。

仕方がないといえば仕方がない。だって特に部活とかに力を入れているわけではない、ごく普通の公立中学校だったわけだし。

だけど、おれらが入学した年と同時に赴任してきた顧問……。この人の指導で、みるみるうちにその学校は強豪になった。

おれが中一の３学期から通い始めた学校は毎年全国制覇するほどのレベルだったんだが、そこと双璧をなすまでに成長させたんだから……凄い人だったよ。

その人の指導を１年も受けられなかったのが、本当に残念でならない。

その人の指導方法は……ぎっちり練習させるわけじゃない。それでも平日は毎日やってたけど。

言うなれば、実戦重視。週２くらいのペースで部員全員の総当たり戦をやって、とにかく試合に慣れてもらおうといった目論みがあったっけ。

その結果によって次の試合に出すかどうかを決めるわけだから、

俄然やる気も出てくるってもんだよな。
……とはいっても、おれらが入る前までの活動なんてそれこそお遊びのようなもので、学年とかはほとんど関係なかった。
それを知ってか知らずか、おれらの代（同じ学年）ってのは数えるくらいしか入部してなかったっけ。
当時はまだ部員数が少なかったから、男女で分けることもなく活動していた。まぁ、さすがに試合は別だったけど。
そこで初めて南野や都萌と会ったんだ。その時から2人とも今と変わらないんだもんな……。

一回目の夏の大会ではさすがに間に合わなかったか、地区予選を何とか勝ち抜く事しか出来なかった。
それでもこの学校から考えるとかなりの快挙だったらしく、校長なんか2学期の始業式後の表彰で涙を流して喜ぶ始末。
だけど、そうなってくると当然面白く思わない奴も出てくるもんだ。
特にテニス部に入った奴らはほぼ全員、何でか知らないけど勉強でもトップクラスの成績だったから余計だ。
劣等感とでも言うのか、そんな気持ちが募ってくると行き着く先は……いじめだった。
その標的になったのは、引っ込み思案な都萌だ。一部の派閥から無視されたりとか持ち物隠されたりとか、まぁいじめの定石みたいな事をちょくちょくやられてたんだ。
でもあいつは、いじめられているという事を自分から話すことはなかった。
いつもより元気がないのは明らかだったんだけど、おれ達はあえて黙ってた。その事であいつに余計な心配させたくなかったからな。
しかし、それにしても酷いことしてくれるぜ。いつだか、シュウの奴も言ってたな。
『人間なんてそんなものだ。誰でもいいから下に置いて優越感に浸

りたいんだ』って。
そうして優越感に浸るのは一向に構わんが、その裏で悲しんでいる奴がいるのを忘れないでもらいたいものだな。

都萌へのいじめは続いていた。でもあいつは隠し続ける。
その現状に、いよいよ我慢の限界を感じた奴がいた。同じテニス部員の1年、古賀潤だ。
潤はどうやら都萌の事が好きだったらしい。ま、これは潤の友人でこれまたテニス部員の綿引直樹って奴から聞いたことだけど。
ともかく、おれらは潤に呼び集められて話し合った。当然都萌には内緒で、だが。
そこでまとまった事は、都萌と同じクラスである潤と直樹が常に都萌の周りにいてやって、何かされそうになる前に未然に防ぐ……というものだった。
翌日よりその計画を実行に移し、毎日の昼休みに報告会のようなものを開くようになっていった。

「どうだ？」
「ああ、今日は大丈夫だったよ」
「オレらの目が黒いうちはめったなことはさせねーよ」
「まったく、いじめなどをする方々の神経を疑いますわ。鉄拳制裁が許されるのでしたら今すぐにでもそうするというのに……」
「まま、南野。ここはひとつ穏便に……。潤、直樹。お前たちもくれぐれも平和的に頼んだぞ」
「わかってるって」
「ともちゃんをいじめる奴はオレが許さねぇ。メタクソのボロ雑巾にしてやる！　……って気持ちで、見張ってやる！」
「……。では、私も及ばずながら鉄拳制裁以外の方法でご協力しましょう。同姓のお友達ですから、その辺りで力になれる事があるでしょうし」

「そうだな。なら、南野はあいつの話し相手になってやってくれ。……はぁ、おれって指図するばっかで何も役立ってないなぁ……」
そうだ。おれは都萌が苦しんでいるのに何もしてやれなかったんだ。
潤と直樹はつきっきりで見守ってあげてたし、南野は相談役だった。
おれは何をしていた？　何もしてあげてなかったじゃないか。だけど……。
「そんな事ないよ。和也は一番役立ってるじゃんか」
「……認めたくねーけど、実際のところそうなんだよな」
「えっ……。どういうことだ？」
「あなたがいるから、私たちは動けるのですよ。あなたの的確な指示があるから……」
「そうそう。ぶっちゃけ潤なんか、お前に指示される前は怪しい奴に片っ端から聞き出そうとしてたくらいなんだぜ」
「それが最善の解決法だと思ってた。お前が冷静に対応してくれたから、こっちも冷静になれたんだ。暴力とかにモノ言わせてたんじゃ本当の解決にはならないんだよな……」
おれの心に訴えかける友人達の温かな言葉。それは決してただの慰めなどではなかった。
「みんな……ありがとうな。それじゃあ、また明日以降も頼んだぜ」
「えぇ、わかってますわ」
「オレにまかせとけ！　四六時中見張っててやるからさ！」
「潤、そういうのってストーカーって言わない？」
「す、ストーカー！？　やべぇ、それじゃオレの方が悪人じゃねーか！」
「まぁともかく、ともちゃんがこれ以上いじめられるかどうかはあなた方にかかっていますから、周囲の方々の動向を逐次見張っていてくださいね」
大丈夫だ。こいつらがいれば、もうそんなことは起こらない。

その考えは的中したらしく、それからは都萌もいつもの調子を取り戻しつつあった。
いじめる方も、反応がなくなったからつまらなくなったのだろう。
ならば、ずっとそのままでいて欲しかった。このまま、平和に時が過ぎて欲しかった。

しかしある日、おれは親父に呼ばれた。
「和也。大切な話がある。心して聞いて欲しい」
「何だよ？」
「……父さんな、他の企業に引き抜かれたんだ」
「え……？　どういうことだ？」
「今勤めているところよりさらに待遇がよくなるが……職場はここからちょっと離れた場所にある」
「……」
「わかってくれるな。転勤、ってことだ。引っ越すから、お前も転校する事になる」
「そ、そんな！　マジかよ……」
「先方は私を必要としているのだ。安心しろ、すでに転居先からお前の新しい学校も決めてある。3学期からは新しい学校だ」
「……わかったよ。でもその学校、テニス部はあるのか？」
「当たり前だ。父さんわざわざそれも調べたんだ。何でも今年の夏に全国制覇を成し遂げたらしいぞ」
「全国制覇……！？」
親の転勤、それに伴う子供の転校……というありがちな流れだったが、どうやら悲観することばかりでもないらしい。
親父が決めてくれた学校はテニスの名門校で、この年の夏に全国制覇を成し遂げた。
おれがそこに行けるってことは、おれも全国レベルの指導を受けられるのか。

それこそ願ってもないチャンスだったが、それはつまり……。
「えっ……マジかよ和也！　お前、引っ越すのかよ！？」
「いきなりだな……」
「困りましたね。あなたが抜けるとなると相当の戦力ダウンが予想されます……」
「和也くん……」
「いきなりですまないな。親父の仕事の都合なんだよ。……大丈夫だよお前らなら。あの先生について行けば全国なんて目の前だ」
「そうじゃねぇだろ和也。戦力ダウンとかそーゆーのは関係ねーよ。せっかくここまで分かり合えたってのにバイバイってどう言うことだよ！　オレらを置いて逃げんのかよ！！」
「潤！　和也にだって事情があるんだ、そんなこと言ったらかわいそうだろ！！」
「何だよ事情って！　事情とか都合なんて、そんなのオトナの勝手な理由付けじゃねーか！　そう言いくるめられてるだけだろーが！」
「すまん……本当にすまん！　でもわかってくれ、頼む……」
「わかんねー！　わかりたくね……」

バシィィィ……ン。

「……ゆ、優香ちゃん？」
「いいかげんにしなさいな。一体全体、いつまでそうやってわがままを押し通せると思っているのですか！？」
周囲を沈黙が包む。南野の眼には……はっきりと涙が浮かんでいる。
「みんな辛いのよ。苦しいのよ。あなただけじゃなくてよ。私も辛いわよ……でも、一番辛いのは中村くん本人なのよ！？　どうしてそれがわからないのよ……」
最後は嗚咽交じりで、言葉になっていなかった。それでもさらに

続ける。
「あなたの言い分も分かります。共に手を取り合って、泣いて、笑って、話し合って、分かり合って……。その結果、あなた方の友情は確固たる物となった事でしょう」
「も、もちろん。ここにいる5人、いつも手を取り合って頑張ってきたよ」
「なので離れることは相当に辛いでしょう……。ですがだからこそ、それだけの厚い友情がたかだか距離を置いた程度で無くなるものでしょうか？」
打たれた頬を押さえながら、潤が応答する。
「いや……無くならない。無くさせない！　例え学校が違おうが、試合で対戦することになろうが、オレは和也との友情を忘れはしない」
「でしたら……笑顔で見送ってあげましょう。それも友情ですわよ」
「……それも友情、か。だったら、オレは親友である和也のために、笑顔で送り出そうじゃねーか！」
「ありがとうな……潤、そしてみんな。これでおれも心置きなく出発できるよ」
「新しい学校でも頑張ってくれよな。お前ならすぐレギュラーだよ！」
「どうかなぁ……。全国制覇した学校だしなぁ……」
「なんだよ、お前らしくねーな。大丈夫だよ。なんたってお前は、オレが見込んだ男だからな！」
「ありがとう。約束するよ。……おれは絶対に負けない」
そこからはいろいろな思い出話に花を咲かせていたが、なぜか都萌だけは話題に加わろうともせずにその場を去ってしまっていた。
思えばこの時……あいつの気持ちに気付いてやるべきだった……。過ぎた事を後悔しても今更って感じがするが。
新天地に渡ったおれは、ひたすらテニスに明け暮れた。

とにかく、無我夢中だった。
レギュラー選抜も、想像を絶するものがあった。
一度も負けてはいけない。格下相手であれば1セット、いや1ポイントも取られてはいけない時もあった。
ただ勝つだけでなく、時間内に勝負をつけろだのといった条件がつく時もあった。
だがおれは退かなかった。全てに打ち勝ってきた。そして、常にレギュラーの座を勝ち取っていった。
そして2年生の途中、おれはここをまとめるキャプテンとなっていた。

もちろん順当に全国大会に出場し、おれが2年生の夏には、この手で全国制覇を掴みとった。
全てが順調に進んでいるかのように見えた。しかし……この時から、いや、引っ越す前からおれは肘に違和感を覚えていた。
それは少しずつ、確実に大きくなってゆき、そして……

「ぐぅあぁぁぁぁぁぁーーー……っ！！！」

3年生の全国大会1回戦、シングルス1。この試合に負けたら全てが終わる。
だが……勝利を目前としたところでおれの肘は爆ぜた。
「キャプテン！」
おれを案じて駆け寄る部員達。だがおれは彼らを拒んだ。ここに来る前にあいつらと約束したんだ。『負けない』と。
棄権なんかしてたまるか。おれは負けない。こんなところでは……。

おれは勝った。めでたく2回戦進出だ。だが試合終了後、すぐに病院に連れて行かれた。

そして医者に告げられた衝撃的な事実……。
「残念だが、もうテニスはできない。リハビリ次第では軽めのことなら出来るだろうが、試合のような激しい動きはもう出来ないよ」
もう、テニスはできない……。覚悟はしていたので顔に出す事は無かったが、全てを失ってしまったような気がした。
このことはすぐに関係者全員に伝わった。
「……」
誰も何も言えなかった。久々の再開がこんな形でおれもみんなも沈むしかなかった。
「じゃあな和也。ゆっくり休んでくれよ……」
潤がそうつぶやくと、みんなはそれに従うかのように病室を後にする。しかし都萌だけはその場に立ちつくしたまま動かなかった。
「和也くん……わたし、どうしたらいいの……？」
「どうしたらいいって、お前も試合あるんだろ？　みんなの所に戻るんだ」
「できないよぉ……。くすん、和也くん……」
ぽろぽろと涙をこぼす都萌。だが泣きながらもさらに続ける。
「わたし……わたし、ずっとさみしかったの……。和也くんがいなくなってから……」
「……」
「ずっとね……和也くんの事が好きだったの。それが分かったのは、和也くんが引っ越すって言ってた時……。その時の何も言えなかった自分が情けなくて、許せなくて……」
最後は言葉になっていなかった。都萌は……おれに寄り添うようにして、声を上げて泣いた。
（ごめんな……。お前の気持ちに気付いてやれなくて……。おれは……、おれは……？）

これ以上は思い出すのも辛い。すまないがおれからはここまでだ。

Chapter4：Solution ～Another Side～

ボクの番だね。
ボクは……ちょっぴり悲しくて、でもすっごく嬉しかったあの時のことを、話します。

「ボク……シュウくんのことが……好き……」
「えっ……？」
言っちゃった。
ついに言っちゃった。
もうボクの頭の中は真っ白。
……その後の沈黙は、永遠みたいな気がした。
それでもボクはシュウくんからの返事を待った。でも……。
「……すまん、ちょっと今日はこの後用事が入ってるから帰らせてくれ」
「シュウくん！　待って……！」
ボクがそう言ったと同時に、シュウくんは行っちゃった。
ひとりその場に残されたボクは……こみ上げてくるものを抑えきれずに……降りしきる雨の中……声を上げて泣いたの……。

ちょっと落ち着いてから帰り始めたんだけど、その間……何がいけなかったのかを考えてた。
ボクは……シュウくんに相応しい女の子になれないのかな……？
そうだよね、ボクがシュウくんを好きなのと同じように、シュウくんもボクの事が好きとは限らないんだもんね……。
でも……そんなのイヤだよ……。
わかんなくなっちゃったボクは、迷惑を承知の上でみさきちゃんに電話してみた。

「あれー、芽衣ちゃん？　どったのどったの？」
「うん。あのね……ボク、さっきシュウくんに告白したの」
「あ……そうなの……。それで、アタシにどうしてほしいの？」
「どうしてほしいって、結果聞かないの？」
「聞きたくないわよ。アタシがヘコむし。それに……芽衣ちゃんだって言いたくないんでしょ？　わかるわよ……聞かなくたって。そんな沈んだ声じゃ」
「……」
「とにかくっ、シュウが何て言ったか知らないけど、芽衣ちゃんはそれでもアイツの事が好きなんでしょ？」
「うん……。それだけは譲れないよ」
「だったら……だったら！　一度くらい失敗したのが何よ！　ホントに好きならねぇ、そんなんでいちいちくじけてんじゃないわよ！　そんな事もわからないの！？　ねぇ、どうなのよ！？」
「み、みさきちゃん……？」
「まったく。ちっとは音遠ちゃんを見習ったらどうなの！？　あの子、兄貴にいっつもいぢめられてるし、突き放されたりもしてるけど、それでもくっつき続けてるじゃないのよ」
「うん……」
「本当に好きって思えるならねぇ、あれくらいできないの！？」
「できなくもないけど……シュウくんに迷惑だろうし……。それに、お兄ちゃんが言うには、それじゃ音遠ちゃんの模倣でしかないみたいだし……」
「かぁ～もう！　いちいち人の話を鵜呑みにしてんじゃないわよ！　出来るんならやりなさいよ！　できるんでしょ！？　どうなの！？　答えなさいよ！」
「……」
「あっとごめん、言い過ぎたわ。……たぶん灯夜は、音遠ちゃんに憧れるのはいいけど、同じように出来ないなら出来ないでもいいっ

て……そう言いたかったんじゃないかな？」
「えっ？」
「なんつーのかね……。音遠ちゃんと同じように出来なくても、それで気に病む必要なんかどこにもないみたいな、そんな感じ。芽衣ちゃんのあるがままに、シュウに接しろみたいな」
「ボクの……あるがまま……」
「芽衣ちゃんは、他の誰でもないんじゃん？　そうでしょ？」
「うん……。ボクはボクだよ」
「シュウの事が好きで好きでたまらない芽衣ちゃんは、今アタシと電話越しに話してる女の子。そうでしょ？」
「うん……」
「よかった。シュウに何かヒドイこと言われてヤケになっちゃったかと思ったわ。でも大丈夫みたいね。まだそれだけ好きって言えるなら……日を改めてまた告っちゃいな！　ね？」
「ありがとう……みさきちゃん……。えぐぅ……」
「礼なんていいわよ！　ほーら、泣くんじゃないの！　びーびー泣く子は嫌われちゃうわよ！」
「ごめんね……。ボク、もう泣かない。もっともっと強くなって、シュウくんにもう一度……もう一度好きって言ってみる」
「やっとその気になったのね。んーじゃがんばってね。そんじゃーね！」
　みさきちゃんはそう言うとすぐに通話を切っちゃった。
　でも……みさきちゃんの一言一言がボクの弱い心を打ち破ってくれた気がする。ボク、がんばらなきゃ！
「はぁ。まったく芽衣ちゃんったらしょーがないんだから。何でまたアタシに相談するかねぇ。アタシに対するあてつけかしら？　……あーアタシのバカ。そんな事考えてんじゃねーわよ」

　あれからシュウくんには会っていない。
　一回だけメールしたけど、返事はない。

シュウくんも……悩んでるのかなぁ？
ともかく明日は月曜日。学校でシュウくんに会えるかも知れない。
会ったらもう一度言うんだ、ボクの気持ちを……。
翌日はもう、その事しか頭になかった。授業内容なんか全然聞こえてなかった。
あと少しで2限が終わってお昼休みになる……かと思った途端、マナーモードにしていた携帯が震えた。
電話かな……？　メールかな……？　と思って見たら、それはシュウくんからの電話だった！
えっ……何で？　何で今なの？　今じゃまだ授業中だから出られないよぉ……むにぃ。
……でもやっぱりシュウくんだ、結局その着信はワン切りだったの……。彼らしいといえば、彼らしい。
一瞬、授業抜け出して出ようかとも思ったけど、そんな暇はなかった。

一応学食の中も探してみたけど、シュウくんは見つからなかった。
適当にご飯を食べた後、いろいろと考えているうちにいつの間にか3限まで終わっていた。ボクは今日はこれで終わり。
シュウくんはいくら探しても居なかったから、電話しなきゃ……。
……コール音のたびに、期待と不安が入り混じった変な感じになっちゃう。
「芽衣か……どうした？」
ひゃっ、出てくれた！　あわわ、しっかりしないと……！
「さ、さっき電話くれたよね？　ゴメンね、授業中だったからすぐ出らんなかった」
「いいよそんな事。それよりさ……、お前に言わなきゃならない事がある」
「……何？」
「俺の……答えだ。今からそっちに行くから待っててくれ」

「え？　今学校にいないの？　ど、何処にいるの？」
「ああ、ちょっとな。海を見てたんだよ……。１０分くらいでそっちに着ける」
「……ボクも海見たいよ。ボクがそっちに行く！」
「いや、いいって……。歩きだろ？　何分かかるかわかったもんじゃねぇ」
「……でも、見たいんだもん……。むにぃ」
「わかった、こうしよう。俺がお前を迎えにいく。だからやっぱお前はそこで待ってろ」
「……うん。待ってるからね……」
海……か。泳ぐのにはまだ早いよね。
シュウくん、海見てたんだ……。
海を見て考えてくれてたのかな？　ボクのことを……。うん、すごく都合がいいねこの考え。

ボクは待った。シュウくんが来てくれるのを。
実際に待った時間は１０分くらいだったけれど、ボクにはそれ以上に思えた。
来てくれなかったらどうしようかとも思っちゃった。
でもシュウくんは、ちゃんとボクに会いに来てくれた……。
「待たせたな。じゃ、行こうか？」
「……うん」
「そんじゃ後ろに乗れ。しっかりつかまってろよ」
「あ……あのさ……」
「ん？　どうした？」
「その……。ゆっくり走ってほしいなぁ……なんて」
「ゆっくり行きたいのか？　安全運転しろっての？」
「あ、シュウくんが急ぎたいならいいよぉ……」
「わかったわかった。やっぱ２人乗りはあぶねーしな。ゆっくり行こうか」

「あ、いいのー？　ありがとー！　ゴメンねわがまま言っちゃって……」
「いいっていいって。そんな事でいちいち感謝されるのって、めんどくせぇ」
「う～……。じゃあ乗るね。いっくぞー！　れっつごー！」
「お前、子供か……？」

ボクを乗せたシュウくんの自転車は、ゆっくりと海に向かって進んでいった。
ボクはその間……シュウくんにしがみついていた。必要以上に。
……なんか体が熱いよ……。すごくドキドキしてるのが自分でも分かる。
苦しいけど……すごく幸せ。
ずっとこのまま……シュウくんを感じていたい……。

そして30分後、ボクたちは海を臨む広場に到着した。
こんな所があったんだ……。この辺はちゃんと下調べしたつもりなのに、やっぱり穴場ってあるんだね。
「……とりあえず、どっかその辺に座るか？」
シュウくんがそう尋ねてきた時、ボクははっとしてしまった。
「ふえっ！？　あ、うん。そ、そうだね。座ろっか。あはは……」
うわうわ、声上ずっちゃった……。恥ずかしいよぉ……。

「……」
「……」
嫌な沈黙が続いた。シュウくんもボクも、お互いを意識しすぎているのか口を開けない。
でもボクは動いた。さりげなくシュウくんの手に自分の手を差し伸べてみた。
……きゃっ、触っちゃった！　どーしよどーしよ、恥ずかしいよ

お……。
慌てて視線を空へと移す。……また雨降りそうだなぁ……。
その時だった。今まで黙りこくっていたシュウくんが、ついに沈黙を打ち破った。
「……こないだは悪かった。あんな形で終わらせちまって」
「もういいよぉ、そんな事……。ボクの方こそ、言うだけでゴメンね……。まだその先のこと言いきってないし……」
「その先のことって？」
「好きってしか言ってないでしょ？その先……」
「……付き合え、って事？」
「むにぃ、先に言わないでよぉ……。でも、それだよ。好きだから……シュウくんの事が大好きだから……ボクと付き合って欲しいの。……ダメかな？」
「……」
う……やっぱダメなのかな……。
「芽衣……ありがとな」
「えっ……？」
ありがとう、って……？
「俺にそう言うの、すっげぇ勇気使ったろ？　……そんなお前の気持ちを考えもせず俺は逃げた。本当に悪い事をしちまった……」
「シュウくん……」
「いろいろな人に相談したんだけど、結局みんな最後は同じ事しか言わないんだよな。『自分の気持ちに素直になれ』って……さ」
「そう……だったんだ」
「お前の気持ちを考えつつ、俺の素直な気持ちを伝えられたら一番いいんだろうが、そうそううまくいくもんじゃないんだよな」
「うん……」
「俺も……嬉しかった。女の子から告白された経験なんてなかったし。だからこそ悩んだ。俺でいいのかとか、仮に俺でよかったとしても、お前を満足させてやれるのか……とか」

シュウくんがそこまで言い終えたところで、大粒の雨が降り始めた。それでも彼は構わず話し続けた。
「でも、そんな事はどうだってよかったんだよな。お前は、俺自身がお前のことをどう思ってるか知りたかったんだよな」
「……うん」
「それに気付いてやれなかったのも悪かった。気付いてれば、お互いにこんなに悩む必要もなかったわけだし」
「……」
「……遅くなっちまったけど、俺の素直な気持ちを言う……」
……。
「俺は、芽衣のことが好きだ」
……！　シュウくん……！　やっと……やっと言ってくれたんだね……。
ありがとう……本当にありがとう……。ボク……ボク……。
言葉より先に体が動いた。
雨が降ってるみたいだけどそんなのは全然気にならなかった。
ボクは……シュウくんに抱きついた……。
やっとつかまえた……。もう絶対に離さないんだから……。

自然と流れ始め、ボクの頬を伝う滴。
シュウくんがそれを拭ってくれた後、ボクを抱きしめ返してくれた……。
ボクたちやっと……一つになれたんだね……？
シュウくん……。ボク、すっごく幸せだよ……。大好き……。
絶対離さないから、シュウくんもボクを離さないでね……。

いつのまにか雨も止み、辺りは夕焼け色に染まっている。
あと1時間ほどで、眼前に広がる大海原に吸い込まれてゆきそうな太陽は、最後のあがきとばかりに赤々と燃えている。
「ありがとうな芽衣……。こんな俺を好きになってくれて」

「ううん、そうじゃないの。そんなシュウくんだから、ボクは大好きになったんだよ？」
「……」
「……えいっ！」
鮮やかに燃え上がる夕焼けが、ボクを後押ししてくれた気がした。
ボクはシュウくんのほっぺたに、小さく口づけをした。
「な、何すんだよいきなり！」
「えへへー。だって好きなんだもーん。ボクのファーストキスは、これでシュウくんのものだね☆」
「こ、この野郎……。そんな事されたら、俺もそうするしかねーじゃねーか、めんどくせー」
「……してくれるの？」
そうするしかないって事は、してくれるって事だよね……？　お願いします……。
と思った矢先に、シュウくんはボクと唇を重ねていた。
わっわっ、恥ずかしいよぉ……。シュウくんも顔が真っ赤だ……。おんなじくらいに恥ずかしいのかな……？
……その時だった。シュウくんはボクの胸の辺りに手のひらをかざしてきた。
あっ……、え……？　シュウくん……？　どうしたの……？
そっ、そんな事されたら、もっとドキドキしちゃうよぉ……。
声に出そうとしたけど……キスしてる最中だから出せない……。
むにぃ……。

それから程なくして、シュウくんはボクと体を離し、納得しながら言った。
「……すげー動いてたな、お前の心臓。そんなにドキドキするようなものかぁ？」
「するよぉ……。ここ、触られちゃったと思ったじゃないかぁ」
「さすがに俺だってそこまではしねーよ。……ってか、あるのか？」

「ひどーい！　ボクだってちっちゃいの気にしてるのにー！　シュウくんのばかばかー！」
ヒドイよぉ、ボク……結構気にしてるんだよ……。ちっちゃい事……。
恥ずかしさのあまりボクはぽこぽことシュウくんを殴った。
もちろん力は入れてないつもりだったけど……無意識のうちに入れてたみたい……。
「痛てーって！　ったく、かわいげがねーなぁお前は……」
「……むにぃ」

二人並んで、夕日が海に沈むのを見届けた後、シュウくんがゆっくりと立ち上がって言った。
「……そろそろ帰るか？　家まで送るよ」
「あ、うん。……もしよければ、ボクんち泊まってく？」
「はぁ？　……そりゃダメだ。悪いから」
「大丈夫だよ。いつも1人だからちょっとだけ寂しいの。それに……彼氏を呼ぶのは自然でしょ？」
……はっ、ボク今、彼氏だなんて言っちゃった！
「……いや、やっぱダメだ。そこまではさせられない」
「……わかったよぉ。じゃあ、今度は泊まってってね？　……約束してくれる？」
「ああ……今度な、今度。約束する」
「絶対だからね……。忘れちゃヤダよ……？」
「わかってるって。いいからさっさと帰ろうぜ。びしょ濡れだから早く風呂入りてーんだ」
「うん。……ゆっくり走ってね？　あと……いっしょにお風呂も入ろうね……」
「またかよ！　ったく注文が多いなぁ……って、えぇ！？」
この日は満月だった。夜空を彩る真円は、優しい光を放ちながらボク達を包んでいた。

家まで送ってもらったボクは、いつまでもシュウくんに手を振り続けた。
ありがとう……。ボク、すごく嬉しかった……。
相変わらずシュウくんは冷たくて、何考えてるかわかんない所もあるけど、そこは少しずつ分かっていかなきゃ。
ホントに好きなら、ちょっとやそっとの事でくじけちゃダメなんだもんね。

音は、単音でも『音』としての存在はあるけど、それだけじゃ寂しい。
いろいろな音が混ざり合って一つのハーモニーを形成したときのそれは、言い表せないくらい素晴らしい。
ボクは今、シュウくんとちぐはぐながらも二人だけの協奏曲を奏で始めた。
つっかえたり、音程間違えたりすることもあるけど、それはお互いを認め合って修正していけばいい。
愛し合う二人なら、きっと出来るはずだから。そうだよね？
ボクたちなら……出来るよね？
いつまでも……二人の中で大切なメロディを奏でていこうね……。
約束だからね……？

ボクからはここまで……です。思い出したら涙出てきちゃった……。くすん……。

Chapter5：腐れ縁

アタシの話題はねー、アレよアレ。
アタシのちっちゃい頃とかその辺よ。
それじゃーいってみよー！

何でかよく知らないけど、アタシと圭輔ってちっちゃな頃から一緒だったのよねー。親同士がお友達だったからかも知れないけど……。
まぁでもそんなことはどーでもよくって、とにかくずっと近くに圭輔がいたみたいな……。生まれた頃から一緒だったみたいねアタシら。
でも半年くらいかな？　それくらいアタシの方が生まれるの早かったから、歩いたのもしゃべったのもアタシの方が早くてね。
でも圭輔ったらしゃべり始めがやたら早かったんですってねー。口から生まれたんじゃないかってくらい。
アタシだってそう言われた事あるけど、あれよりはおしゃべりじゃないと思うのよー。懐かしいなぁ……。あんなこともあったっけ……。

「おーいみさきー。こっちこっちー」
「まってよ～けいすけく～ん。はしったらあぶないってママにいわれてるでしょー？」
「へーきへー……きぼべふぁ！？」
「……ど、どーしたの！？　だいじょーぶ？」
「いたいよ～……。あしひねっちゃった……」
「えっと……えっと……ど～しよ～……あうぅぅぅ……」
「ないちゃだめだ！　ぼくはいたくてあしがうごかせないから、ぼ

くのおうちにいってママをよんできて！　できる？」
「うん……。けいすけくんのママをよぶんだよね？」
「そう。はやく！」
「わかったよぉ。まっててね……」

これ、いくつの頃だったっけ。二つか三つの頃だったっけ？
その頃圭輔の奴が走ってる時に豪快に転んじゃって動けなくなっちゃったから、アタシが圭輔のおかーさん呼びに行ったんだっけ。
まったく、強がっちゃって。痛くて泣きたかっただろーに、アタシの前で涙見せたくないからって泣かなかったんだから……。
でもアタシ、知ってるんだ。家に連れられた後大泣きしてたってこと。アンタのおかーさんから聞いたわよー？
「あの子ね、うちに帰ったらやっぱり痛くて大泣きしたのよ。みさきちゃんにだけは見られたくなかったから必至に堪えてたんだって」
って。そうよ……。アンタいっつも言ってるじゃないのよ。『泣くことはカッコ悪いことじゃない』って。
言ってるアンタがカッコ悪いとか思ってちゃ説得力ないじゃないのよ。
あーあと、こんなこともあったっけ……。

「ちょっと！　やめときなさいよそーゆーことは！」
「うるせぇ！　オレは頭に来たんだ。センコーのヤロー、机の中にミミズ入れたくらいであんなにギャースカ言いやがって！　仕返ししなきゃ気がおさまらねぇ！」
「アンタが悪いんじゃないのよ！　仕返しなんかやめなさいよ！
それじゃいつまで経っても終わらないじゃない！」
「みさき……。男ってのはな、時としてしゃかいあくにたちむかわなくちゃいけないんだ」
「バッカじゃないの！？　勝手にしなさいよ！　いーだ！」
「女には男のろまんがわかんねーんだよ！　かえれかえれ！」

……あのバカはしょーがないのよねー。
これは確か小学校3年生くらいの時で、先生（女の先生ね）の机の中にミミズ入れてたのよーアイツ。
本人には何にも悪気なかったから、先生がやったの誰だーって聞いたときもウザイくらい元気に『はーいオレオレ！』とかほざいてたのよね。
で、もちろん先生に大目玉くらってさすがのアイツも反省した……かと思ったら、この悪ガキは仕返しするとか言い始めて。
アタシが止めるのも無視してたっけ。
「ちくしょーあんにゃろー。今度はダンゴ虫をいっぱい入れてやる！　どこかな～ダンゴ虫ちゃ～ん」
アタシは勝手にしなさいよとか言ったけど、夜の学校ってなんかありそーで怖いじゃん？
いかな圭輔でも何かあったら大変だから、アタシは帰らないで見てたのよ。怖かったけど……。
したら……圭輔の奴とんでもないことやらかしちゃったのよ～。
「……ん？　何だこれ、ジャマだな。えいっ！」
圭輔は持ってたおもちゃのスコップでそれを叩いたのよ。
その正体は……蜂の巣！　いや～～～～～～～！
「うわ……うわあああ！」
「あーもうっ！　まったくアイツったら！」
アタシは腰抜かしちゃった圭輔の腕を急いで引っつかみ、その場から大急ぎで逃げた！　それこそ、脱兎の勢いで！
「み……みさき？　どうしてここにいるんだ？」
「どーでもいーでしょそんなこと！　早く逃げるのよ！」
アタシらは逃げた。とにもかくにも逃げた。ひたすらに逃げて、ようやく辿り着いたのは、アタシん家の近くの公園。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
「まったく……はぁ……はぁ……、何であんな事したのよ……」

「うるせーな……はぁ……はぁ……。蜂の巣だったとは知らなかったんだよ……」
「とにかく……あのベンチに座るわよ……はぁ……はぁ……」
「そうだな……」
目に付いたベンチになんとか座れたアタシらは、大きく息を吐きながらお互いの顔を見た。
「ぷっ……あっははは！」
「な、何で笑うんだよ！？」
「や～だも～！　鼻の頭になんかついてんだも～ん！」
「なにが……って、あ、ドロか。ちくしょー、テメーにもつけてやる」
「ちょっと！　何すんのよ！　やめてよー！」
「やめねー。ほれほれぃ！」
「やめなさいったらー！」
圭輔もアタシも、何でこんな所にいるのかすっかり忘れたまま、バカみたいにドロのつけっこしてたのよね。
もちろん、この後2人して親にイヤってほど怒られたけどね。
しっかしアタシらって、ホント懲りることなく親を困らせてたわよね。毎日毎日よく続くなーって、自分でも感心したくらい。

でもね、イタズラだけじゃなかったのよ。
圭輔もアタシもさっぱりした性格っつーか、曲がった事がキライみたいなそんな感じだから、なんかおかしいぞって思った事には食いついていったりね。
あれは……中1の時だったかな？
確か、2学期の中間テストの時。圭輔は過去2回のテスト（1学期の中間と期末）で両方ともクラストップ、学年全体でも五本の指に入るくらいのおっそろしい成績出しちゃったわけ。
アタシはさすがにそこまでは届かなかったけど、それでも学年で20番以内に入れて、アタシ的には満足いく結果だったわ。

でも、普段のおちゃらけた態度の圭輔から考えるとどうにもありえないわけ。
いつも近くにいたアタシでさえ半信半疑どころかウソでしょー？
って思ったくらいだから、他のみんなはさぞかし信じられなかったんでしょーね。
だからね、こんな疑惑が上がったのよ。『圭輔はカンニングをしている！』ってね。
……火のないところに煙は立たないとはよく言うけれど、無理もないわよね。
でもアタシは、圭輔はそんなヒキョーな真似とかする奴じゃないってのは長年の付き合いでわかってたから……。

そんなある日の帰りのホームルームで……。
「もうすぐテストが始まるから、みんなしっかり勉強するのよー？」
「はーい先生ー！」
「あら、何かしら？」
「カンニングはしちゃダメですよねー？」
「そりゃそうよ。ダメよ？　そんな事しちゃ」
「じゃー先生は、このクラスにカンニングがあること知ってますかー？」
「えっ……？　あったとしたらとても残念だけど、誰がやったかなんてまだわかってないし……。分かってたとしてもこの場じゃ言わないけど……」
どっかの誰かの唐突な言葉で、喧騒に包まれた教室内。あの頃の異様な空気は今でも思い出せるわ。
「あなたたち、そういう事をむやみに言うんじゃありません！」
「でも見逃せないんでーす！」
「わかったから黙りなさい。とにかく、カンニングなんかしちゃダメですからね！！」
何よいきなりカンニングだなんて。それじゃまるでこのクラスに

カンニングがあるって言ってるよーなもんじゃん。実際言ってたんだけど……。不愉快だわ。
……と、そんなアタシのところに圭輔がやって来た。
「いやーいきなりカンニングあるとかってマジかねぇ？　誰がやったにしろ、そんなんに頼ってちゃーダメだよなー？」
「そーよね。まったく、こんな風にバレるくらいなら初めっからやらなきゃいいのにね」
アタシらがそんな風にだべってると、何人かがいきなりアタシらを取り囲んできたのよ。
「とぼけてんじゃねーぞ秋野。カンニングしてんのはテメーだろ」
アタシらを取り囲んできた連中の一人がいきなり、こんな事をほざいてきた。
もちろんアタシも圭輔も、何を言われたかわからずに口をぽかんって開けたまんまだった。
「は？　何でオレなの？」
「何でオレなの、じゃねーよ！　お前、カンニングしてるだろ」
「ちょ、ちょっと待てって！　だから何でオレなんだよっての！
オレはそんな事してねーっての！」
「まだとぼけてんのか？　お前、1学期の中間と期末の順位いくつだよ？」
「中間が学年4位で、期末が学年3位。クラスではどっちも1位だった。それがどうかしたかよ」
「ほらな。やっぱこいつカンニングしてんぜ」
「ちょっといい加減にしなさいよ！　何で圭輔が疑われなきゃなんないわけ！？　バカじゃないの！？」
「だってこいつ以外誰がしてるってんだよ。こいつがこんないい順位になれるなんてカンニングするしかないじゃねーか」
「何でそう言い切れるのよ！　コイツが実際テスト中に教科書とか、他の子の答案見てたのをアンタらは目撃したとでも言うの！？」
「それは……ないけど、順位が何よりの証拠だろ？」

「状況証拠だけで……。アンタらねぇ、いい加減にしないと……」
「みさき、もういい」
「圭輔……？」
「どうやら、お前らはどうしてもオレを悪人に仕立て上げたいらしいな」
「仕立て上げたいもなにも、お前が悪い事してるからじゃねーか」
「ちっ……じゃあ、こうしよう。次のテストの時、オレは学校に何も持ってこない。学校に置きっぱにもしない。もちろん、筆記用具もだ」
「ちょっと！　なに勝手にそんなこと決めて……」
「お前は黙ってろ。……そして、先生に事情話して、オレだけ別の教室でテスト受けさせてもらうようにする。もちろん同じ時間にだ。それでどうだ？」
「おもしれー。それで1つでも順位落としたらカンニングした事を認めろよな。当然同じ順位もダメだからな」
「だからしてねーって……。でもこのままじゃラチが明かないからそれでいいよ。まだ何かあるか？」
「いや、いい。逃げんなよ！？」
「わかってるって。じゃ今から先生のとこ行くぞ」
そう言うと圭輔は何人かと連れ立って職員室に行った。
……ってちょっと待って！？　前回より上の順位って言ったら、学年2位以上ってことじゃない！　いくら圭輔でもそれは厳しくね……？　しかもテスト直前の確認も出来ないわけだし。
そんな事を考えてるうちに、アタシらに詰め寄った奴らの何人かがアタシに話しかけてきた。
「なぁ、お前って秋野と付き合ってんのか？」
「は……はぁ？　何よいきなり？」
「すごい噂だぜ？　それ」
「噂だってばただの！　アイツとはただの幼なじみの腐れ縁！　それ以上でもそれ以下でもありません！」

「どうだかねぇ……へっへっへ。せいぜいダンナが犯人にされないように守ってあげるんだね」
……。まったくガキで困るわね。アタシにはそんなつもり……ないのに……本当に……。

そしてテストが始まった。
圭輔は今使われてない教室で、筆記用具も先生から渡されたものを使って受けた。
アタシは信じてるよ。アンタはカンニングなんてヒキョーな真似するよーな奴じゃないってね……。

結果としては……。
「……2位？　学年2位？　クラス2位じゃなくて？」
「やったじゃん圭輔！　おめでとう！　アタシ、嬉しい……」
「ちょ、何でお前が泣くんだよ！？　泣きてーのはこっちだってのに……。ありもしねー疑いかけられて全く散々だったぜ」
なんでか知らないけど、涙が溢れて止まらなかった。どうしてなのかな……？

これらのエピソードを思い出すたんびに、アタシの中に熱いものがこみ上げてくるのよね。もちろん誰にも言ってない。これはアタシの……アタシだけの思い出なんだから……。
どんなに強い向かい風も、いつかは止む。でも止むまで耐えられない人もいっぱいいる。それに負けなかった人は……何よりも尊いし……美しい。アタシも負けたくないよ。
長い人生、坂道を上らなきゃいけない時もあるし、強い逆風に襲われる時もある。でも負けちゃいけないのよね。負けたらそこでオシマイだもんね。

みんな戦って、そして勝ってきた。

でもアタシは、戦ってない。
戦わなきゃ負けないけど、勝てもしない。
戦って勝たなきゃ、意味がない。
弱いままのアタシじゃ恋もできないし、する資格だってない。
アタシのまわりの女の子は、みんなそれぞれの幸せを持っている。
それらはすべて、戦って勝ち取った結果。
アタシだけなんだか、取り残されちゃってる。
だけど、それを妬む資格もアタシにはない。
みんなのように戦ってないから。
取り残されてるんじゃなくて、取り残されないように動いてないだけ。
だから……動かなきゃ……変わらなきゃ……。
そうだよね……。ね？

……なーんかアタシの話ってか、圭輔の事ばっか語っちゃった気がする……けど、まーいーわ。

Ｃｈａｐｔｅｒ６：挫折と栄光、そして……

あ……わたしですか……？　大丈夫かなぁ、泣かないで話せるかなぁ……？

途中で泣いちゃったらごめんなさい。それではいきます。

中学生のころのわたしは、ずうっとテニスをやっていました。

何かに打ち込んでいれば、いつかはこんな弱虫な性格も改善されると思ったから、小学生からやってたテニスを本格的に始めたんです。

でも……仲良くなれたのは同じ部活の人たちくらいで、他の人と仲良くなるのはわたしには難しかったの。声をかけたくても恥ずかしくてできなかったから……。

結局、テニス部のお友達と一緒のクラスになれなかった３年生の時はちょっとだけイヤだった。

辛うじて体育の時間は隣のクラスと合同だったから、優香ちゃんと一緒に授業できて少しはましだったけど……。

あとは……理科の時間とホームルーム。担任の先生はテニス部の顧問で理科の先生だったから。

先生は部活の時はちょっぴり厳しいけれど、よく冗談とかも言う。

それが授業になるとすっごく面白くて、たまに授業にならない時もあったなぁ……。

「黒板って……黒くないよなぁ。どっからどう見ても緑色だよなぁ。でもこれには理由があるんです」

ほら、こんな感じに。でも、わたしも気になってた。

「昔、アメリカからブラックボードってのが日本に持ち込まれて、それをそのまま和訳して、黒板。その時はちゃんと黒かったんだけど、そのあと色々あって、この色に落ち着きました」

そうだったんだ～。でも、授業に関係ないよね、それ。
他には……。
「チョークって漢字にするとどうなるか知ってますか？　……実は、『白』い『墨』って書きます。白墨ってね」
うん、それは知ってる。文房具屋さんに売られているものとかにそんな字が書かれてたのを見た事あるし。
「でもチョークって白だけじゃなくて赤とか黄色とかあるよね。それこそ、色々。じゃあ、この赤のチョークは何なんだろう？　国語の先生にでも訊いてみればわかるかな？」
それも授業となにか関係あるの……？
あとは……。
「今日の実験はアルコールランプを使う！　当然火も扱うわけだから、くれぐれも気をつけるように！　あと、アルコールだからって間違っても飲んだりするなよ！？」
飲まないよ……。だってわたしたち、まだ中学生だよ？
「この中に入ってる液体はメタノールと言って、飲んだら死んでしまいます。本当です。ウォッカとかテキーラとか、強いお酒とは根本的に違うんです」
もしかしたら、普通の授業よりも熱を入れて説明してるかも知れない……。
「それと、カップラーメンが食べたくなったとしてもこれでお湯を沸かそうとは考えないこと！　いかんせん火力が弱いので、日が暮れてしまいます」
……ってな感じ。でも、ただ言うだけじゃなくて、本当にやっちゃったりするから面白かったの。
「あーそうそう。昨日、家で試しに私物のアルコールランプ使ってお湯沸かしてみたんだけど……ダメでしたー！」
ホントにやらなくてもいいのに……。これが部活になると……。
「こらーっ！　もっとしっかり返す！　ボールにぼくの顔を思い浮かべればもっと強くリターンできるからやってみな！」

「後衛守るんならもっと深く守るんだ！　そう、マリアナ海溝くらい深くね」
「ロブはもっと！　もっと高く！　あそこに飛んでるスズメを狙うんだ！　……って、かわいそうだよね」
厳しいんだか面白いんだかわかんないよぉ。でも……こんな先生だったから、わたし達は一人も辞める事無く続けられたんだね。
あと、こんな事もあったっけ……。ある時を境に、わたしはいじめられるようになってしまいました。
でも、いつもやられてる事とそんなに変わらなかったから慣れてたし、他のみんなに打ち明けて余計な心配させたくなかった……。
それでも顔には出してたみたいで……。先生に言われてから気付きました……。
「都萌さん。あなたは何かを隠してはいませんか？」
「えっ……。いえ、してません……」
「そんな悲しそうな顔をして……してないなんて言わないで下さい」
「う……」
「ぼくにはわかるよ。これでも一応、あなたの担任ですからね。クラスのみんなの様子は出来るだけ見てるつもりです」
「先生……。くすん……」
「泣かない泣かない。ほら、言ってごらん？」
「はい……」
わたしはここで、いじめられている事実をすべて打ち明けました。途中で泣いちゃってうまく言えなかったけど……。
「よく……言ってくれた。頑張った。偉いぞ！」
「うぅ……。えぐぅ……」
「そんな不安定な気持ちで、よく今までぼくの指導についてきてくれたね……。都萌さん、あなたは強い子だ。でも、現状を乗り越えればあなたはもっともっと強くなれる」
「はい……」
「つらいかも知れないけど、今は耐え忍ぶんだ。それでもくじけち

ゃったら、ぼくとか部員のみんなに相談するんだ。絶対にあなたの力になってくれるはずだから……ね」
先生にしがみつくようにしながら、わたしはずっとずっと泣き続けた。救われた気がして嬉しくて、でも弱い自分が情けなくて……。くすん……。

思いがけない事は続くもので、突然和也くんが遠くへ引っ越す事が発覚してしまいました。
それを知ったとき、潤くんは最後まで反対してたけど最終的には認めていた。
でもわたしは……イヤだった……。和也くんと離ればなれになるなんて……。
勉強もスポーツも何でも出来ちゃう和也くん。
みんなに分け隔てなく接する事の出来る和也くん。
ちょっぴり鈍いところがかわいい和也くん。
わたしはそんな彼が……いつの間にか好きになってたから……離れたくなかった……。
遠くに行って欲しくなかったの……。

後日、部活の中で正式に和也くんが正式に引っ越す事を告げました。
「……いきなりで悪いけど、そういうことです。おれが次に行くところは……」
学校の名前を出した途端、みんながどよめき始めました。
「知っての通り、この夏全国制覇を成し遂げたところだ。おれはそこに行く。いつか、みんなと試合をすることもあるだろう。お互い頑張りましょう。今まで、ありがとうございました！」
わかってる……わかってるけど……、わたし、和也くんがいないと頑張れないよぉ……。
でも……頑張らないといけないんだよね……。それが和也くんの

望みだから……。
それで和也くんの期待に応えられるのなら、わたしは頑張ります。
それからしばらくして、わたしに対するいじめもすっかりなくなり、やっと毎日の生活に充実感を得られるようになったある日のことでした。
わたしに『女子テニス部の部長にならないか』という声がかかりました。
そんな……。わたしなんかに務まるのかな……？
でも先生ははっきりとこう言いました。
「都萌さんでなければできない」
「えっ……？」
「確かにあなたは引っ込み思案だ。泣き虫だ。精神的にも弱い」
「うぅ……」
「おぉっと。まだ終わってないぞ。……だけどあなたには優しさがある。全てを委ねられる……全てを包み込む……優しさが。あなたを信じている人は多い」
「でも……優香ちゃんは……？」
「あの子も力はあるのだが、力だけだ。あなたのように包み込む優しさが、足りない。本人には内緒にしておいて欲しいけども」
「……」
「和也くんはあの時、何て言ってた？　お互い頑張ろうって言ってただろう？」
「はい……」
「彼は、あっちのテニス部のキャプテンになったんだと。さすがだよ、あの名門をまとめるまでになるなんて」
「凄い……」
「だろう？　彼も遠いところで頑張っているんだ。だからあなたも同じように頑張ってみようよ、ね？」
「……はい。わたし、頑張ります！　この弱虫な自分を変えるため

にも……」
「ありがとう。……あなたなら大丈夫だ、きっと出来るよ。わからない事があっても、ぼくとか部のみんなと協力していけば大丈夫。頑張っていこう！」
「はいっ！」
部長となったわたしは、今まで以上にテニスに打ち込みました。
クラスのみんなの事は気にせず、ただ黙々と日々を過ごしていきました。

そして……3年生の夏の大会。
ついにわたしたちは全国大会に進む事が出来ました。もちろん初出場。
みんな緊張を隠せないみたい……。
「いやいや……何なんだよこの雰囲気！　オレら完全に場違いだな」
「ですわね……。なんと言っても、全国ですからね」
「……ともちゃん、緊張しないのか？」
「えっ？　そりゃ少しはしてるよ……。でも、ここまで来て今更そんな事も言ってられないよ」
「さすがですわね。期待していますわよ、部長！」
「も～優香ちゃん、部長って呼んじゃやだよ～」
「まぁ、とにかくだ。みんな、場の雰囲気に飲まれて本来の実力が出せなかったなどとは言ってくれるなよ？」
「任してくださいよ先生！　オレらは負けません！」
「頼もしいな。いいか！　みんなは実力でここまで勝ちあがってきたんだ。それを忘れるな。ここまで来たら、もう結果うんぬんなんてどうでもいい！」
先生が優しく、しかし力強く声をかける。
「3年生にとっては最後の大会になるから、決して悔いを残さぬよう、全力で戦ってきてもらいたい。……キミ達なら大丈夫。自信を持って行け！　以上！」

「はいっ！」

そして、ついに試合が始まった。
わたしたちは初出場なのでもちろんノーシード。
和也くんのいる学校を初めとした強豪とは次に当たる……。
でも、負けない！　ここまで来たわたし達に怖いものなんてないんだから！
結局、男女とも1回戦をストレート勝ちしたわたしたちは、参考として和也くんたちの試合を見に行った。
そこではシングルス1、最後の試合が行われていた。
コート内にいる2人の選手のうち、一人は和也くんだ。
ゲーム数は5－2で、和也くんが大きくリードしていた。
このまま行けば大丈夫かな……と思った矢先……。

「ぐぅあぁぁぁぁぁーーー……っ！！！」

「……和也くん！？」
断末魔の悲鳴とも取れる悲痛な叫びと共に、和也くんは力なくコート内にくずおれた。
肘を押さえながら鬼の形相をしていた。まさか……？
「肘が……壊れてしまったのか……。くそ、よりによってこんな大事な時に……」
「先生！？　……どう言うことですか？」
「彼は……たまに肘をかばいながら練習をしていたんだ……」

試合は和也くんが勝ったけど、そのあとすぐに病院に連れて行かれたみたい。
わたしたちも日を改めて駆けつけて、久々の再会を果たした。でも……、こんなのってないよ……。
「じゃあな和也。ゆっくり休んでくれよ……」

潤くんがそうつぶやくと、みんなはそれに従うかのように病室を後にする。
でもわたしだけはその場に立ちつくしたまま動かなかった。いや、動きたくなかった。
「和也くん……わたし、どうしたらいいの……？」
「どうしたらいいって、お前も試合あるんだろ？　みんなの所に戻りなよ」
「できないよぉ……。くすん、和也くん……」
泣きながらもわたしはさらに続けた。
「わたし……わたし、ずっとさみしかったの……。和也くんがいなくなってから……」
「……」
「ずっとね……和也くんの事が好きだったの。それが分かったのは、和也くんが引っ越すって言ってた時……。その時の何も言えなかった自分が情けなくて、許せなくて……」
「……そうだったのか。ありがとう。……もう泣かないでくれ……」
「えぐぅ……」
「すまなかったな……。お前の気持ちに気付いてやれなくて」
「……くすん」
「お前は気づいてなかったかも知れないが、いつかお前がいじめを受けてた時、おれ達はこれ以上お前がいじめられないように動いてたんだ」
「……」
「おれがみんなに指示を出して、潤と直樹が見守っててて、南野はお前の相談役になってた」
「……」
「みんなお前が好きだから、守りたかったから、そうしていただけだ。他の理由なんて無い。と言うか、好きなものを守るのに理由なんか要らない」
「……？」

「だ……だから……な、おれも……お、お前のこと……。えっと、その……。あ～……、ダメだ、言えねぇ」
「ありがとう……和也くん……。言わなくてもわかるよ……」
「……」
「たとえ距離はあっても……心はいつも一緒だよね……？」
「ああ……」
「泣き虫で弱いわたしだけど……負けないように頑張ります……」
「ああ……。お前なら大丈夫だ。お前は本当は強いんだからな……」
「ありがとう……。ふぇぇぇぇぇん……」
「……。（これでいい、これでいいんだ……。これで都萌が吹っ切れて今後の試合に全力で望めるなら……この判断は正しかったはず……）」
横たわった和也くんと、少しだけ唇を重ねる。……心配しないで、わたしは大丈夫。

わたしは戦った。そして勝った。和也くんと約束したんだ、負けないって。
涙も流さなかった。流さないようにするのも勝負だから。
でも、戦っていたのはわたしだけじゃなくて、潤くんも直樹くんも優香ちゃんも、他の部員のみんなも全力で戦った。
そして、ついに決勝戦まで勝ち抜いた。これも奇跡とか偶然とかじゃなくて、必然。
だって、負けないと信じて戦えば、決して負けることはないんだから。

そしてついに、決勝戦が始まった。一進一退の攻防。
あっちがポイントを取ったらこっちがすぐに取り返し、またやり返し……。その繰り返しだった。
どちらが勝ってもおかしくなかった。みんな、勝ちたいと言う気持ちが満ち溢れていた。

そして……ついにわたしたちは男女共に勝利し、全国制覇を成し遂げた。

その日のミーティングでは……みんな泣いていた。あの先生ですら、目を真っ赤に腫れ上がらせていた。

「よくやった。がんばったな……。本当によくやってくれた……。ぼくは……人生で一番の嬉しさに包まれたよ……。みんな、ありがとう……」

その言葉を受けて、みんなはさらに泣いてしまった。その中でわたしは必死に堪えてたけど……、その後起こった出来事には耐えられなかった。

「……みんな、おめでとう」

和也くんが……来てくれた……。簡単な言葉だったけど……わたしにとっては凄く重みのある言葉だった……。

その時、ずっと必死に抑えていた涙がどっと溢れてきちゃったの……。

「和也くん……。うわあぁぁぁぁぁぁん……！」

人目もはばからず、和也くんに抱きつきながらわたしは泣いた。いつまでも……声を上げて……涙が枯れるまで……。

うぅ……。思い出したら……また泣けてきちゃうよ……。ふぇぇぇぇぇん……。

Ｃｈａｐｔｅｒ７：勘違いから始まる出会い

私でしょうか。……なんとなくやりづらいですわね。
まぁよいでしょう。では私が語らせていただきますわ。

８月中ごろにオーシャンズオリエントに行きましたが、その数日後に今度は女性だけで集まって遊びに行った事がありました。
それというのも、男性陣がことごとく都合がつかなかったため『それなら女の子だけで遊びに行こーよ！』との提案により決まったものです。
遊ぶと申しましても……女性が集まってすることといえばやはり、買い物になるのですね。
実際この日もほとんどはデパートの中を歩いていた気がしました。

約束の時間まであと３０分……ですか。少々早く到着しすぎてしまいましたわ。
このまま待っていても仕方が無かったのですが……特に何もする事がありませんでした。
「あー優香ちゃーん！　ごめんねー、待った？」
私が到着してから１０分後でしょうか、芽衣さんが来ました。
その姿は、どこか活発な少年を彷彿とさせる服装でした。彼女はこういった服装が最もお似合いなのでしょう。
「ボクも早く来たつもりなんだけど、優香ちゃんの方が早かったね」
「えぇ……。私は待たせるのは嫌いですから」
「へぇ～、偉いなぁ。なんか優香ちゃんって、すごく落ち着いてて大人っぽいよねー。それに、すっごくキレイだし……。ボク、優香ちゃんがうらやましいな……」
「そんな、私なんか……。芽衣さんもかわいらしいですわよ」
「えっ……そうかなぁ？」

「それに、明るくて活発で。そんなあなたを見てるだけで、こちらもつられて明るくなれそうですわ」
「そんな褒めないでよぉ。照れちゃうよ……」
芽衣さんはそう言いながら、両手で顔を覆いうつむいてしまいました。その顔は赤くなってましたね。ふふっ、かわいらしいこと。

それからさらに5分後、ともちゃんも合流しました。
「あっ……優香ちゃんに芽衣ちゃん。早いね」
「うん。でもボクより優香ちゃんの方が早かったんだよ？」
「私は他の方を待たせるのは嫌いなので……」
女三人寄ればなんとやら、とはよく言ったものです。そこからは話題が尽きる事もなく、話が続きました。

約束の時間を少々過ぎたころ、ようやく最後の一人であり、今回の発案者のみさきさんがやって来ました。
「あーもーゴメンねーみんな！　言い訳になるかもだけど、そこにすっごいかわいい服があったからついつい見とれちゃってたのよー。マジ悪いわ。あとでジュースおごるからゴメンね？」
「よろしくてよ、そこまでなさらなくても」
「そーお？　じゃーおごらなーい！」
「あら、切り替わりが早いのね」
「へへーん、まーね。そいじゃー行くわよーみんな！」
「おーっ！」
「お……おーっ」
「……」
私は小さく拳を突き上げながら、目的のデパートに向けて歩き始めました。

「あ～！　これかわいい～！」
「でしょでしょ？　アタシがさっき見とれてた理由が分かったでし

ょ？」
「うん！　……でも、ちょっと高いねぇ」
「ですわね……。０を一つつけ間違えたのではないでしょうか？」
「ちょ、どこのフリマよそれー！？　つーかお嬢ってさー、絶対その金銭感覚おかしいって！　着てるのはけっこー高そうでオシャレなのにー」
「これは……母が買ってきたものです。私は必要ないと申しましたのに……」
「でもさ、いいお母さんじゃない！　優香ちゃんのことをいつも考えてるみたいな……。その服、すっごく似合ってるもん。あと、落ち着いてるのに動きやすそうだし」
「……」
確かにこの服は動きやすい。
よもや母は、あまりにもモノを欲しがらない私を見かねてこういった買い物をなさっているのでしょうか……？
だとしたら後日、お礼を申し上げねばなりませんね。

デパートを出た私達は、あまりの暑さに足取りが重くなってしまいました。
「あ～、あっついわねーまったく……」
「そう……だね……」
「暑い……」
「もーダメ。そこのコンビニ入ろっ？　こんな暑くっちゃやってらんないわ」
「あ、さんせー！　まだ読んでなかった雑誌があったんだよねーボク。あるかなぁ？」
「名案ですわね。立ち読みはさすがに一人ですと後ろめたいですから、共犯者を探していましたのよ」
「あはは……。じゃあボクが一緒にやってあげる！」
「ありがとう。これで心置きなく立ち読みできますわ」

「……あっ、ちょっと待ってみんな。ハンカチ落としちゃったみたい。汗拭こうとしたら見つからないの……」
「あら、大丈夫？　私も探しましょうか？」
「……うん。ごめんね。先入っててくれると嬉しいな」
「りょーかい。まぁ、言われなくてもそーしてたけど」
「じゃボクら、中で待ってるからね。またね！」
　みさきさんと芽衣さんを残し、私はともちゃんの落としたハンカチを探しに行ったのですが……どのあたりに落としたのか尋ねるのを失念してしまいました。
　まぁそれでも、我々が辿った道をそのまま戻れば見つかるでしょう……。とりあえず二手に分かれて探し始めました。
「わたしはこっちを探すから、優香ちゃんはそっち探して？　見つけたらメールしてね。わたしの方も見つけたらメールするから」
「えぇ、わかりました」
　この時に二手に分かれていなければ……今どうなっていた事でしょうか。
　目的のものはいくら探しても見つかりません。
　なので引き返してみると……この辺りで探していたはずのともちゃんの姿がありません。
　おかしいわ……ここは開けた通りのはず。よほどの事がない限り見失う事がないというのに。
　その時、私の目に入ったのは、悪名高き裏通り。……まさかとは思いましたが、私はそこに足を踏み入れました。
　そこではこんな事が起こっていたようです。

「あっ、あれだあれだ。よかった～見つかった……きゃっ！」
「あぁん？　なんだぁこのガキ。突然ぶつかってきやがって」
「あ……ごめんなさい……」
「おーいおいどうしてくれちゃうんだよお嬢ちゃんよー！　間接外れっちまったじゃんかよー！　動かせねぇよ！」

「あーらら、マジかよ。ちょーっとこれは見逃せないなぁ」
「あ……あの……」
「ちょっとこっち来てもらおうか？」
「いや……えぐぅ……」
「……え？」
「ごめんなさい……。ふぇぇぇぇん……」
「うげ！　やべーよ！　この子泣いちまったよ！」
「やりすぎちまったかな……？」
「えぐぅ……くすん……。怖いよぉ……優香ちゃん……」
「お・ま・え・ら？」
「ひぃっ！」

ドガァッ！
バギャッ！
コケーッコ！！
アッー！
スパーン！

「……ったくこいつらと来たら、いつまでこんな事してやがんだ。それに、女子供には手ぇ出すなってあれほど言ったのに」
「ひっく……くすん……」
「ごめんな、怖がらせちまって。もう大丈夫だからな」

……私が駆けつける前にはこんな事が起こっていたようです。
「……ともちゃん！」
私が来た頃には、彼女は恐怖のあまり泣いてしまっていました。よほど酷いことをされたのですね……。可哀相に。
「優香ちゃん……怖かったよぉ……。ふぇぇぇぇん……」

「よしよし……。もう大丈夫ですよ」
「あんたの連れだったのか。悪かったな、このバカどもには後で俺からキツく言っとくから」
「……お待ちなさい。このまま帰るおつもりですか？」
「……え？」
「とぼけるのも大概にしなさいな。あなたなのでしょう？　この子をここまで怖がらせたのは」
泣き虫な彼女ではありますが、いくらなんでもここまで泣くというのは……。
「何をなさったのかは聞きたくありませんが、ここまで怯えるというのはちょっとやそっとの事では説明がつきません！」
「確かにそいつらに徹底させなかった点で言えば、俺にも責任がありそうだな。でも実際にやったのは俺じゃない。そこだけは信じてくれないかね」
「この期に及んでまだそのような態度を取るのですか！？　制裁を加えます。……はぁっ！」
私は未だに知らぬ存じぬを押し通そうとする彼に向けて、挨拶代わりの上段蹴りを放ちました……が、彼は全く動じる事もなくかわしました。
「ひゅう、いきなりご挨拶だな。やるのかい？」
「そちらにその気がなくともそのつもりです！　たぁっ！」
「売られたケンカは買わなきゃな。うらっ！」
もう一度、今度は左脚で上段蹴りを繰り出しましたが、彼も同じように放ってきました。
お互いの蹴りがぶつかり合い、脚にかなりの衝撃が走りました。
「……くっ、なかなかやりますわね」
「そっちこそな！」
「これならどうです！？　やぁっ！」
「うぉっ！？　……マジかよ」
そんな……。コンクリートをも打ち破ったことのある私の後ろ回

し蹴りまでかわされるなんて……。この方、いったい何者？
「やるじゃねーかあんた、女のくせに……って、こんな言葉は失礼か。じゃあ俺からも攻めさせてもらうぜ！」
そう言うと彼は大きく跳躍し、壁を蹴りつつこちらに降りてきました。
三角跳び、ですか。地形をうまく利用した戦法ですわね。ですがその程度なら容易にかわせます。
余裕を持ってかわしたら、彼は勢い余ってゴミ置き場に激突しました。
ふふん、自滅ですか。おめでたいですわね。……しかしそれは次の行動への布石でしかなかったのです。
「うっ！？」
私の首筋に突き付けられた何か。それは……彼の手刀。
どうやら隙を突かれ、背後に回りこまれてしまったようです。
先ほど、彼がゴミ置き場に突っ込んだのを見た私は……確かに気を許してしまいました。
ですが、そんな一瞬を見逃さなかったとは……。
「ここが戦場だったら、あんたはこの瞬間、首を落とされてたな」
「くっ……そのようですわね……。ですが！　はっ！」
こちらも一瞬の隙を突き、再び彼と向き直る事に成功しました。
「ち。手を止めたのがアダになったか」
「これで状況は五分五分ですわね。……覚悟なさい！」
相手が体勢を立て直すのを待たず、私は渾身の力を込めて右の脚を振りぬこうとしました。
しかし、その行為は意外な人物によって止められる事になったのです。
「やめてーーーーーーーーーーーーーー！」
「……ともちゃん！？　何故止めるの！？」
「もうやめてよ……くすん……。この人はわたしを……助けてくれたんだから……」

「本当なのですか！？　彼に脅されているのではなく！？」
「その子にして見ればそうなのかもな……。てか脅すって、俺どんだけ悪者なの？」
「……申し訳ありませんでした。私の早合点でご迷惑をおかけしました……」
「いいっていいって、気にすんなよ？　しっかり説明しなかった俺も悪かったんだし……。それに、久々にマジなケンカができていい気分だったよ。あんた、強ぇな！」
「……」
「でもよぉ、その子から目ぇ離したあんたにもちっとは責任あるぜ？　こんな所、小学生がうろつくのはよくねぇな」
「……あの、この子一応私と同じ年齢なのよ？」
「は！？　マジ！？　はー、いるもんだなーそーゆー娘って。俺の姉貴より幼く見えるぜ」
「ともかく、私達はもう行きますわ。お騒がせしてしまい申し訳ございませんでした。それでは……」
「ありがとう……ございました……」
私達は足早にその場を去り、みさきさん達の待つコンビニへと急ぎました。

「あーおかえり！　どしたの？　随分遅かったみたいだけど？」
「まぁ、いろいろありましたのよ」
「そーお？　ねーねー、次どこ行くどこ行く？」
「そろそろ立ち読みも飽きちゃったからね。おやつでも食べに行かない？」
「あ、さんせー！　どこがいい？　やっぱＨｅｘａｇｒａｍ？」
「そうだね。あそこ以外は考えられないよ」
「ええ……。私もそこならよろしくてよ」
「じゃー決まりね！　れっつごー！」

Ｈｅｘａｇｒａｍへ至る道のりで、私は先ほど対峙した彼の事を考えていました。
暗い場所で、正面からしっかりと見てなかったのですが、あの顔はどなたかに酷似していました。
それにあの言葉……。『俺の姉貴より幼く見える』というものも気になりました。もしや……？
「ちょ……ちょいと？　どーしたのーお嬢？　着いたよ？」
「……あぁ、失礼致しました。少々、考え事をしていたもので……」
「えー何なに？　気になるなー」
「それは……内緒ですっ」
そう、内緒なのです。……ですが、この店の主人には見破られてしまうのでしょうね……。
私は、あの彼に再び出会えるのでしょうか。出会えたらまた拳を合わせるのでしょうか。
もし……そうでなかったとしたら……、出会いの形があんな形でなかったら……？

……あら、失礼しました。話が逸れてしまいましたね。コホン……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4200o/

Precious Melody（番外編）

2011年1月11日23時13分発行